## 3. 外傷歯の固定

### 臨床例3ー1　スーパーボンドによる外傷歯の暫間固定

①2003年３月。10歳男性。受傷１時間後に来院。側方脱臼と陥入の合併症と診断する。

②初診時、デンタルX線像。1|1と2|2のセメントエナメルジャンクションの位置に注目。

③1|1は鉗子による復位修復の後、固定用ワイヤ―とスーパーボンドによる暫間固定をする。

④受傷２週間後の正面観。暫間固定は10日後に撤去。

⑤受傷2週間後に|1にTransient Marginal Breakdownが認められたが、約1ヶ月後に消失。

⑥2005年6月。受傷2年2ヶ月後の正面観。アンキローシスは無く、順調に歯間空隙の閉鎖が行われている。歯冠色に変化が認められるが臨床症状は無く、電気歯髄診はマイナス。

⑦同口蓋面観。

⑧同デンタルX線像。|1には歯髄腔の狭窄（Pulp canal obliteration）が認められるが、1|には認められないため、抜髄根充を行う。

⑨2011年10月。受傷８年6ヶ月後の正面観。1|1にアンキローシスも低位咬合も認められないが、には1|色調の変色が認められる。

⑩同咬合面観。

### 臨床例3ー2　スーパーボンドによる外傷歯の暫間固定

①12歳男児。歯冠及び歯根破折のため、断髄を受けたが、その後の治療を依頼する紹介状を持参し、来院。|1の歯冠歯頸部から口蓋側歯肉縁下まで破折線は続いており、動揺度2。

②歯冠の位置を整復しつつ、隣接面にスーパーボンドで接着固定した。

③歯冠・歯根破折線と断髄後のセメントが見える。

④2週間固定後、歯冠側破折片を除去した。

⑤歯根側は矯正的に挺出化を図った上、仮封冠で修復を行いつつ、抜髄根管充填を行った。

⑥術後1年4ヶ月経過。ほぼ良好に経過している。